

秩父大宮における市街の拡大と商家の変遷

川崎 俊郎

I はじめに

秩父盆地には大宮と呼ばれた秩父市中心市街をはじめ、小鹿野、皆野、下吉田などいくつかの市街地がある。試みに、明治期以降の秩父盆地内の市街地人口を比較すると、明治19年(1896)では大宮が4,713人、下吉田が2,478人、皆野が1,849人、小鹿野が1,533人¹⁾などとなっており、首位の大宮と次位の下吉田では人口規模で約2倍弱の開きがあった。これが昭和12年(1937)になるとそれぞれの人口規模は、秩父町22,703人、小鹿野町5,506人、吉田町4,435人、皆野町3,640人²⁾となっている。人口規模の較差は首位の秩父町と次位的小鹿野町では4倍弱に広がっており、時代が下るにつれて、秩父市中心市街を含んだ秩父町(大宮)が秩父盆地の中で突出していったことがわかる。秩父市の中心市街は現在、秩父盆地における最大規模の市街地³⁾であり、南北約2.5km、東西約1.5kmのやや南北方向に長い市街地を形成している。この中心市街には秩父鉄道や西武鉄道が乗り入れ、秩父小野田セメント(旧秩父セメント)のセメント工場もあり、秩父盆地の中では著しく都市的景観が卓越している。こうした景観は秩父盆地のその他の市街地、商業中心にはみられない。この景観上の違いはいつ頃どのように成立したのであろうか。秩父市の中心市街が秩父盆地の中で卓越した商業中心に成長したと考えられる明治期以降の市街地の变化と商家構成の変遷を中心にこの点を考えたい。

ところで、明治以降、日本のほとんどの都市が人口規模や商家戸数・企業数の面で成長傾向にあり、市街地規模の拡大や商家戸数の変遷だけでは秩父市の中心市街の成長は日本経済の成長過程や明治期以降の近代化・産業化から説明されてしま

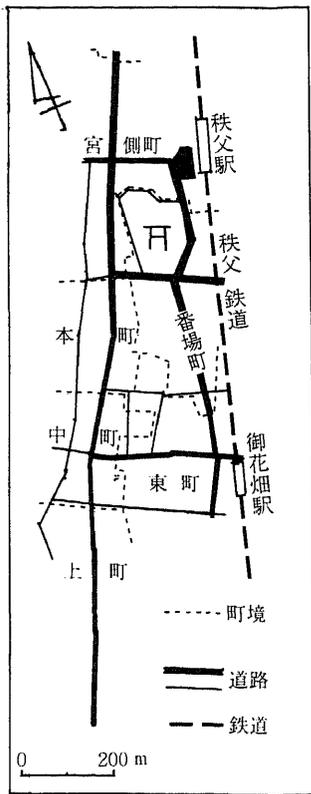
う。しかし、同じような経済成長、近代化の過程にあったなかで、相対的に秩父市の中心市街が盆地内において卓越した商業中心に成り得た要因を、経済成長論などからよりも、秩父盆地の地域的な特性から説明できないであろうか。そこで本報告では明治期以降の市街地と商家構成を捉える上で、商家戸数や売上金額といった計数的なものよりも、各時期の特徴的な商家や市街地内の機能分化などに着目し、秩父市の中心市街が盆地内において卓越した商業中心に成長した要因の考察を進めたい。秩父市中心街のことを、本文中では秩父大宮または秩父大宮の中心市街と呼称することにする。

II 明治初期の秩父大宮の市街地景観と商家

1) 明治初期の市街地景観

現在の秩父市の中心市街は宮側町、本町、中町、上町、東町、番場町などの地区から構成されている(第1図)。宮側町から上町までは旧秩父往還に沿って商店や銀行が並び、複数の大型小売店もある。東町はこの表通りに直交する道路に沿って商店街を形成している。また番場町では秩父神社の正面から延びる道路と神社周囲に商店や飲食店が並んでいる。秩父大宮は、どのようにして現在のような商店街が形成されたのであろうか。ここでは明治以降、秩父大宮の中心市街の形成過程を考える上で基礎となる明治初期の市街景観を復原することを試みる。

明治初期の秩父大宮市街の景観を復原する資料としては、まず明治11年(1878)の大火で類焼した範囲を示した絵図があげられる⁴⁾。この絵図は「如上ノ災禍ニ亡失シタル家屋位置並ニ其ノ区域ヲ摘写セルモノ」であるため、焼失をまぬかれた「家



第1図 現在の秩父市中心街の概要

屋位置」については記載が省略されている。しかし中町を中心とした当時の秩父大宮市街の家並や秩父神社などの宗教施設が図示されており、景観復原には有効な資料である。これによれば南側の上町のはずれに石垣を組んだ塚の上に柳が植えられており、ここが市街の南端を示していたと考えられる。この柳に対応していたと考えられるのが、宮之側の中程にあった松の植えられた塚であり、町の北端を示していたと考えられる。中町を中心とした家並は、短冊状の地割りを示しており、そのいくつかは「久二持 和泉屋孝八借店」などと記されており、表通りの店に店借人が入り商売をしていたことがわかる。また表通りの西側の家屋列の裏手はハケと呼ばれる段丘崖になっており、いくつかの湧水が井戸として図示されている(第2図)。こうした井戸は生活用水や農業用水とし

て利用されたほか、酒造用の用水としても利用された。現在も秩父市で酒造を続けている株式会社矢尾の酒造部と武甲酒造がいずれも表通りの西側に店舗を構えているのは、このハケの井戸水を利用していた名残である⁵⁾。また絵図には下位の段丘面に「今宮長屋」と記された建物があり、今宮神社の境内に長屋が建てられ、そこに商人や職人が入っていたことがうかがわれる。似たような長屋風の建物は、表通りをはさんで反対側の惣円寺の付近にも2軒ほど認められる。こうした建物は表通りに対して横町を形造っていた。

ところで表通り中心とした市街地はどの範囲まで及んでいたのであろうか。大火の絵図では明治初期の秩父大宮全体の市街地像は不明な点が多い。そこで地租改正時に作成されたと考えられる絵図を用いて明治初期の市街地の範囲を捉えることにする。この絵図は作成年や作成者等が記入されていないが、各地筆ごとに地目、面積、所有者および一部の地筆については縦横の間数が記入されている。そして字下町、字中町、字上町を中心に付箋で地番と判断できる番号が振られており、さらに地番を付けるために書き込まれたと思われる朱線が引かれている。これらのことからこの絵図は地租改正の初期に地券発行のために作成された絵図と考えられる⁶⁾。以下、本稿ではこの絵図のことを地券絵図と呼ぶことにする。これらの資料と明治9年(1876)に作成された各字ごとの改正名寄帳をもとに明治初期の宅地の分布を復原したものが第3図である。

明治初期の秩父大宮市街の基本はほぼ南北に伸びる表通りを中心としており、その両脇に短冊状地割りの宅地が並んでいた。宅地は秩父神社領に含められていた字宮之側から字上町まで連続していた。そして表通りの東側には横道があり、それぞれが小規模な横町を形成していた。秩父神社へ通じる横道を妙見横町、その南側を十七屋横町(または十五番横町)、さらにその南の横道を天王横町、そして惣円寺脇を通る横道を東横町(惣円寺横町)と呼称した。また、東側には河岸段丘を一段下りたところに今宮神社があり、この今宮神社

を取りまくように表通りに対する裏町が形成され、今宮横町あるいは今宮長屋と呼称されていた⁷⁾。東横町は横道に沿って家屋が連続しており、比較的商業機能が卓越していた横町を形成していたと考えられる。このほかの横町はいずれも小規模であり、秩父神社前の妙見横町でさえも宅地がまばらであり、一部には畑として利用される地筆もあった。さらに秩父神社正面の道路も現在みられるような家屋が連続する商店街的な景観はみられず、むしろ畑地利用などが卓越していた。

第3図に示した地価等級は、明治9年の改正名寄帳から坪ごとの地価を算出したものである。これによって宅地が連続していた秩父大宮の市街地のうち、どの範囲がとくに商業的に価値が高いと判断されていたかを間接的ながら示し、合わせて明治初期の商業的な土地利用の範囲を示した。

ここから表通りに面しているながら下町の北側と上町の南側、そして下町の北側ある宮之側では地価に大きな違いがあったことがわかる。下町の西側および中町西側の中程までは坪単価46銭、これに向かい合う形で下町の東側と中町東側の東横町に入るところまでは坪35銭となっている。これに続くのが中町西側の残りとお上町のうち一番北側の大きな地筆⁸⁾までで、坪35銭となっている。ほぼこれに対応する形で、東側の範囲が坪単価25銭となっている。この順序で上町の南側に行くに従って地価は低下して行き、南側では坪単価9銭までになっている。下町の北側にある宮之側も西側が25銭、東側が18～13銭となっており地価の較差がみられた。また横町も東横町の一部を除くと坪9銭であり、表通りとの間で較差があった。

宅地の地価から見ると、秩父大宮市街の高地価な地区は下町から中町の北側半分であり、そこが中心的な商業地区であったと推測される。そしてそれに次ぐのが中町の残りとお上町の一部であり、それ以外のところは地価で見ると、商業的な性格が弱かったと考えられる。また同じ下町でも西側の宅地が地価が高いのは、宅地の裏の段丘崖にいくつかの井戸(湧泉)があり、酒造業者がこれを利用することが多かったことなどが、その理

由の一つと考えられる⁹⁾。

2) 明治初年の商家構成

a. 市街地内の商家構成の特色

南北方向の街路を基本とした秩父大宮の市街地ではどのような商家が活動していたのかを明治3年(1870)作成の「武蔵国秩父郡大宮郷戸籍帳」¹⁰⁾を手がかりに検討して行くことにする。

明治3年の時点で大宮郷全体の商工業者戸数は289戸、うち「土着者」すなわち江戸時代以前から大宮郷に籍をもち、多くは地所や屋敷をもっていた商家、職人(以下店持ちとする)が164戸、また店借りをしていた「他所為稼来住のもの」が125戸¹¹⁾となっている。このうち第3図に示した市街地の範囲にはほぼ相当する字上町、字中町、字下町、字東横町、および秩父神社領の範囲にあたる字番場と字宮之側に居住していたと考えられる商家・職人を次のように比定した。前出の地券絵図に記載されていた土地所有者の並び順から、戸籍が字上町の住人から字中町、字下町、字東横町の順に記載されていることがわかり、各字の店持ちの商家・職人をおおよそ特定することが出来た。また店借りの商工業者も店主の並び順に記載されており、同様の方法で字ごとのおよその戸数を推定することが出来た。この結果、秩父大宮中心市街の商工業者戸数は店持ち、店借り合わせて200戸で、大宮郷全体の商工業者の約70%にあたる。このうち店持ちは107戸、店借りが93戸であり各字ごとの戸数は第1表の通りである。字ごとの商工業者数を比較すると、下町が70戸と圧倒的に多く、第2位の中町の36戸の2倍弱である。上町も中町と同数の36戸であるが、町の表通りの長さが中町の2倍近くあることを考えると、上町の商工業者はかなりまばらであったと推察される。秩父神社領は32戸の商工業者を数えたが、地券絵図の土地所有者と照合させるとその多くは字宮之側にいたことが判り、字番場の商工業者は極少数であったと考えられる。惣円寺横町や今宮横町はこれらと比較すると戸数は少なく、それぞれ19戸と7戸¹²⁾であった。

それぞれ町の商工業者の構成の特色は一概にいえないが、下町が最も多様な業種構成をもっており、36業種を数えた。同業種として戸数が多いのは、糸繭商(7戸)、萬諸商(6戸)があげられる。しかし、秩父大宮の商業活動を特徴づけていた絹取引に関わったと考えられる商家は、確認できる範囲では2戸のみである。また職人やサービス業と判断される業種が16種もあり、なかでも茶屋、酒食商、蕎麦温頓商などの飲食業や髪結、湯屋、貸本渡世、按摩渡世といったサービス業といえる業種、また医師や入れ歯職人がいたことは同町が大宮郷の市街地の中でも中心商業地区としての性格をもっていたことを示すものであり、先述した地価が下町で最高値になっていたのも、こうした商業の中心性を反映していたものといえよう。

これに対して中町は、飲食業やサービス業にあたる業種は少なく、江戸時代からの伝統をひく絹商・絹糸商・蚕種絹商・絹繭商など絹取引に関わったと考えられる商家が6戸確認できる。下町では絹商よりも糸繭商が卓越していた状況とは対照的であった。この絹商のうち5戸が「土着者」、すなわち秩父大宮在住者で占められていた点も特徴的である。糸繭商も5戸を数え、下町に次いでいた。業種は22業種で上町よりも業種の点では少なかった。

上町は業種数は27業種と中町より多いが、下町や中町に比較すると特産品の絹や幕末開港以降その価値を高めていた生糸を扱う商家はわずかに3戸のみであり、較差が現れている。また陣屋があった関係か、上町には郷宿が4戸あり、他の町にはない特色を作っていた。

秩父神社領や今宮横町では「～職」や「～渡世」といった名の業種が多く、茶屋や酒食商、饅頭商といった飲食業者も比較的多かった。太物商や荒物商といった商家は認められない。東横町にも似た傾向がみられるが、こちらは豆腐商や魚商といった食品販売業が目立ち、小間物商や石工などの職人がこれに続いた。いずれの横町でも絹や糸繭を商う商家はほとんどなく、呉服太物商などの存在も認められていない。

以上のような商家構成の特徴は、下町を商業の中心地区として明治初期の時点ですでに表通りと横道での商業的土地利用が分化しつつあったことを示唆している¹³⁾。

b. 店借り人の特色

秩父大宮の商家構成の中で、江戸時代以来特徴的であったのが「抱え」とか「店借り」と呼ばれた他所出身の商人や職人がいたことである。明治3年の時点でも、第1表に示したように93戸の他所出身の商人・職人がおり、秩父大宮の商工業者のうち、約40%は他所出身の商人・職人によって構成されていた。各字ごとの内訳を見れば下町が最多の36戸で、これに秩父神社領の15戸、東横町の13戸となり、上町12戸、中町10戸と続く。商業の中心であった下町に他所出身の商人・職人が多くいたことは首肯されるが、秩父神社領の宮之側や東横町の商家の中にしめる他所出身の商人・職人の割合が高かったことも注目されよう。東横町の場合、同所の惣円寺が門前を中心いくつかの長屋をもち、そこに店借人を入れていた。戸籍帳では4戸の商人・職人が惣円寺の店借人になっていた。

こうした店借り人は、どのような地域から集まり、どのような職種に従事していたのであろうか。店借り人の多くは秩父大宮の近隣農村からの出身者で、秩父郡内の出身者だけで60戸にのぼった。出身地は秩父郡内に広がっていたが、なかでも横瀬村からの出身者は13戸を数えた。このほかに出身者数が多い村は久那村、山田村、寺尾村(いずれも4戸の出身者)があり、秩父大宮に隣接する村からの出身者が多くを占めた(第2表)。こうした近隣出身者はさまざまな業種に就いたが、比較的営業規模が小さいと考えられる職種で、飲食やサービス業が多かった。例えば、餅菓子商や菓子商に就いたものは6戸であり、このほかに蕎麦温頓商や酒食商などを含めれば13戸を数えた。また日雇や農業庸作といった賃労働と考えられる業種の店借人の例も確認される。こうした小規模な商業活動は秩父大宮の商業活動の特色であると同時に

第1表 明治3年における秩父大宮の商家構成

業種	上町		中町		下町		秩父神社		東横町		今宮横町		合計
	店持	店借	店持	店借	店持	店借	店持	店借	店持	店借	店持	店借	
糸絹大織商	1												1
絹糸商		2											2
絹商						1							1
絹織商			1										1
糸商	1		2		4	3			1				11
糸織商				1									1
酒造	1												1
醤油						1							1
醤油水油造						1							1
酒商						1							1
醤油造								1					1
太物商		1		1									2
真商		1		1									2
真織商					6								6
質高商						1							1
質屋・指物商					1								1
質屋・絹商					1								1
古鉄商					2								2
古香商					2	2							4
漆屋		2			1								3
壳漆					1								1
小間物商	3		1		1				1	2			8
瓦物商			2		1	2							5
瓦物木製商					1	2							3
瀬戸物商					1								1
襦商	2				1		2						5
茶商		1			1	1	1						4
播草商									1				1
製商	1	1											2
米穀商			2										2
肉商	1												1
乾物・魚商	1	1											2
魚商					3			1	1				5
豆腐商								1	1				2
果物商	3	2											5
菓子商		1		2	1								4
肴菓子商									1				1
餅菓子商									1				1
餅屋	1								1				2
染物商				3	2			1	3				8
真小織商									1				1
郷宿	3	1											4
旅館			2		3								5
旅館			1										1
酒造			1		1	2		1	1				6
米穀商				1	1		2						4
糸織商					1								1
糸織商									1				1
漆商										1			1
漆屋													1
貸本渡取					1								1
製織商	1	1		1	1	1	1		1				7
医師						1							1
按摩		1			1								2
栞屋					1								1
機工		1											1
指物商				1	1								2
大工					1	1							2
縫造工					1								1
縫具商						1							1
塗り師					1								1
製織り						1							1
石工									1		2		3
炭炭										1			1
傘工									1				1
機工	1												1
勘帳				1					1		1		3
電燈電工													1
製治具		1			1	1							3
製具仕立													1
裁縫		1			2								3
染物職	1												1
足袋職			1										1
下駄職					1								1
菓子職	1				2								3
製作		1											1
日雇							1						1
木材渡取										1			1
古鉄渡取							3						3
監印き							4						4
不明					3								3
合計	24	12	26	10	34	36	17	15	6	13	0	7	107

〔「武蔵国秩父郡大宮郷戸籍帳」より作成〕

第2表 明治3年における他所商人の出身地内訳

国	郡村	
武蔵国のうち 秩父郡内(60)	横瀬村(13) 久那村(4) 山田村(4) 寺尾村(4) 品沢村(3) 皆野村(2) 吾野村(2) 黒谷村(2) 藤田村(2) 上吉田村(2) 大野原村(2) 田村郷(2) 下吉田村(2) 上田野村(2) 下田野村 三沢村 大野村 名栗村 柄谷村 那賀村 白久村 薄村 金崎村 上影森村 中津川村 大宮郷 芦ヶ久保村 長留村	
	武蔵国(11)	足立郡(2) 多摩郡 入間郡(2) 比企郡(2) 高麗郡 埼玉郡 児玉郡
	近江国(5)	蒲生郡(5)
	信濃国(4)	伊那郡(2) 佐久郡 小県郡
	越後国(3)	刈羽郡(2) 頸城郡
東京府	区内	
甲斐国	山梨郡	
三河国	碧海郡	
上総国	山辺郡	
不明(6)		

〔「武蔵国秩父郡大宮郷戸籍帳」より作成〕
注) ()内の数字は人数を示している。無いものは1名を示している。

じめ、5戸存在し、このうち和泉屋孝八と矢尾五兵衛はいずれも矢尾利兵衛家からの血縁分家であった。近江商人の多くは呉服太物商や荒物商、酒造業や質屋などいくつかの営業部門をもち複合的な経営を展開していた。酒造業や醤油醸造業は越後国刈羽郡、頸城郡の出身者が中心であった。矢尾利兵衛家なども酒造を営んだが、酒造の実務は刈羽郡出身の杜氏に任せており、秩父大宮の酒造業はそのほとんどが頸城郡、刈羽郡出身の杜氏あるいは酒造業者によって行われていたと考えられる。近江商人や越後出身の酒造家はいずれも比較的大きい資本を必要とする業種に携わっており、なかでも矢尾利兵衛家に代表される近江商人は、その多角的な経営形態と相まって、秩父大宮の商業活動の中で中核的な商家群の一つを形成していたといえる。こうした近江商人や酒造家の多くは「召仕」と呼ばれる奉公人を抱えていた。例えば矢尾利兵衛家の場合、奉公人の構成は、近江出身の手代2名と奉公人12名、越後出身者で杜氏と考えられる奉公人が2名、秩父郡内出身者の奉公人が2名となっており、このほかに若干の酒造に関わる季節労働者がいた¹⁵⁾。こうした「召仕」を抱えていた商家は10軒を数えたが、このうち8

に、秩父大宮を取りまく農村部における経済活動とも密接に関係していたと考えられる¹⁴⁾。

一方、遠隔地から秩父大宮に参入した商人としては近江商人や越後出身の酒造家があった。近江商人は寛延2年(1749)に来住した矢尾利兵衛家をは

軒までが近江商人に代表される遠隔地出身であり、この時期、秩父大宮の大店の経営が、他所出身の商人によって担われていた側面があったことを物語っている。

明治初期の店借人は、一方で秩父大宮周辺の農村部出身の小規模な商人・職人から構成され、他方では近江や越後出身で、大店を経営していた他所商人がいた。前者の存在は秩父大宮だけではなく、それを取りまく周辺農村部において小商品生産や小規模な商業活動が盛んであったことを反映していたと考えられ、この地域が明治初期の時点で、すでに非農業部門への経済的依存度が比較的高い状態にあったことを予測させる¹⁶⁾。また後者は、秩父大宮において他所商人の資本や経営の展開が江戸時代後半にはすでに一定の比重を占めるようになっていたことを示している。

Ⅲ 明治後期から昭和前期までの商家構成と市街地

1) 明治後期における商家の構成と市街地

a. 営業便覧からみた明治後期の商家構成

明治10年代、秩父大宮は商業活動の面で大きな転機を迎えたとされている。なかでも、幕末開港以降の生糸輸出の開始と秩父絹生産の衰退、さらにそれに代わる秩父縞、秩父緋といった秩父織物生産の拡大は、秩父盆地における商品生産と流通の結節点としての秩父大宮の商家構成や都市機能にさまざまな影響を与えたと考えられる。また郡制の施行による行政機能の集中や道路の開削や改修に代表される交通体系の変化もこの時期におきた。こうした変化は秩父大宮の商家構成や市街地の規模にどのような影響を与えたのであろうか。

明治後期における秩父大宮の商家構成を知りうる資料としては明治35年(1902)発行の『埼玉県営業便覧』(以下、『営業便覧』とする)が市街地全体を捉えうる資料としてあげられる。また同年発行の『秩父繁盛壽嬉録』はいくつかの大店の店頭が描写されており、当時の市街景観の一端を知ることが出来る。ただしいずれの資料も、その性格

上悉皆調査されたものではなく、一部には誤記や欠落があることは注意を要する。『営業便覧』に関してはその他の資料や、一部は聞き取りによって補正できるものは補正を行った。

第3表は『営業便覧』をもとに作成した町ごとの商家数と業種を示したものである。明治初期、すでに秩父大宮の中心商業地区であった下町は31業種、51店舗が記載されている。明治3年の戸籍帳から推定した商人・職人の数より少ないが、これはおもに大工や鍛冶職、湯屋、茶屋渡世などの職人やサービス業者が記載されていないためと考えられる。商家構成の中で特徴的なのは、織物買継商と糸繭原料商が他の町に比べて圧倒的に多いことである。織物買継商や糸繭原料商は9軒を数え、うち6軒は明治初年には下町において店を構えていたものである。代表例としては、下町の角地に店を構えていた柿原萬蔵商店があげられる。柿原家は江戸時代以来、絹買継を行っていた商家であり、中町の大森喜右衛門家と共に「二大買継商」と呼ばれていた¹⁷⁾。6軒のうちには絹商や糸商の系譜を引くものばかりではなく、桶屋や呉服商からの転業例もあった。また残りの3軒は明治3年の戸籍帳では確認できない商家であり、他所商人の可能性が高い。絹織物から縞や緋の取引に代わったことで、それまでの絹商人だけではなく、他所商人の新規参入があり、さらに同じ町内の商家が転業によってこれに対応した。下町の特色は、このほかに書籍や時計などの買い回り品を扱う店がみられ、八十五銀行秩父支店をはじめ西武商工銀行本店や郵便局も立地していた。こうしたことは、下町が明治初期以上に秩父大宮において商業中心の機能を強めていたといえる。銀行や郵便局を支えていたのも秩父大宮の有力商人であった。西武商工銀行は前出の柿原萬蔵が主体となり設立した銀行であり¹⁸⁾、郵便局も明治以降有力商人の一つとなった宮前藤十郎(書籍店舗経営)が経営の責任を持っていた¹⁹⁾。

中町では商家・会社を含めて32業種、50軒を数えた。同町は明治初年にはある程度の絹商の集中がみられたが、この時期になると大森喜右衛門商

第3表 明治後期における秩父大宮の商家構成

業種	上町	中町	下町	宮側町	東横町	今宮横町	妙見横町	合計
織物買継商		1	3					4
糸織原料商		1	6	1				8
蚕種商	2	5						7
蚕物業委託具		1						1
糸取機械販売			1					1
織機製造			1	1				2
書籍			1	1				2
文具			1					1
時計商								0
呉服商	1	1						2
和洋小問物		3						3
小問物商			2	1	2			5
洋物商			1					1
足袋商		2	3	1				6
呉服商			1					1
太物商		2						2
古物仕切		1						1
古物商				1				1
桶商				1				1
籠商				2				2
箆商				1				1
下駄商	1	1	1	1				4
荒物商		1	1	1				3
金物商	1	1	1	1				4
陶器漆器商		1	1	1				3
陶器商				1				1
紙荒物商			1					1
桶商				1				1
養蚕染料商				1				1
薬商		2	1					3
穀荒物商	1							1
米穀薪炭商		3	2	5	1			11
穀商		1						1
油商			1					1
燗草商	2		4		2	1	1	10
燗草茶商		2		2				4
乾物商		2					1	3
菓了商	1	2	4	3	2			13
酒商			2	2				4
酒醬油商		1						1
洋酒商		1						1
靴商			1					1
豆腐商			1		1			2
肉商				1				1
牛肉商			1					1
魚商					1			1
木材商		1		1		1		3
石材商				3				3
質屋				1		1	1	3
蜜蝋商			1					1
烏屋				1				1
玩具商					2			2
旅人宿	4	2	1	3	1			11
旅館	1	1	1	2				5
飲食店	2	2	2	4	1	1		10
料理店		2		3	3	3	1	12
寿司			1		1			2
蕎麦屋				1		1		2
劇場		1						1
理髪店		2	1	1	1			5
医師	1		1			1		3
病院				1				1
請負業				1				1
新聞出版				1				1
運輸		2	1					3
鍛冶職	1			3				4
馬具工				1				1
漆具商					1			1
表具師						1		1
印形		1						1
籠甲細工		1						1
襦袢製造			1					1
張り物				1				1
燈台製造								0
下駄櫓材		1						1
仕立て		1						1
染物業	1				1			2
染色工								1
活版印刷		1						1
鋸屋						1		1
機業						2		2
銀行		1	2					3
郵便局			1					1
秩父物産織物						○		1
改仲株式会社						○		1
合計	17	50	53	57	20	13	6	216

(『埼玉県営業便覧』より作成)
注) ○は工場があったことを示す

店のみが織物買継商として残っており、他の絹商は廃業している。かわりに米穀薪炭商や太物商、乾物商といったさまざまな物品販売業者がみられた。また蚕種商も多く、秩父盆地における養蚕業の進展への対応がうかがわれる。『秩父繁盛壽娛録』の描写から見ると、中町の商家は下町の商家に比較して間口や店構えが大きい店が多かったようである²⁰⁾。

上町は商売を行っていた家は少なく、わずかに17軒のみであった。資料上、零細な商家や職人は『営業便覧』に記載されない可能性があったことを考えると²¹⁾、上町における商家はこれよりやや多かった可能性がある。しかし、明治初年同様に上町は商業活動の面では中町や下町に比較して小規模であったといわざるを得ない。比較的目立つ業種は、旅人宿や蚕種業であり、矢尾利兵衛家を除けば呉服商や荒物商といった物品販売を行う商家はほとんどなかった。

下町の北側にある宮側町の商家構成はどうなっていたであろうか。業種が36、商家軒数57と数の上では下町を上回っている。明治3年の秩父神社領での商家数が32軒であり、これらが総て宮側町に属していたわけではないことを考えると、約2倍に近い増加といえる。主な業種としては旅館や旅人宿、飲食店、料理屋などサービス業に相当する業種が多い。物品販売では太物や荒物、陶器商のほか酒商もみられた。このほか石材商や箆商といったやや特殊な業種もみられる一方、新聞発行所といった出版業者もいた。新聞は小鹿野などの秩父盆地内の他の市街地で独自に発行された痕跡が見あたらないので、この時期の秩父大宮の中心機能を考える上で、一つの手がかりとなる²²⁾。これらのなかには新聞発行所を始め、明治以降開業した店もあり、宮側町が拡大していったことを示している。宮側町が拡大した要因の一つには、明治19年(1886)に開通した秩父新道(児玉・秩父大宮間)の影響が考えられる。この新道開削の結果、それまで正丸峠や定峰峠を利用した峠越えの道の利用から、馬車輸送を利用できる新道ルートの利用が重要になった。宮側町の旅館や旅人宿²³⁾

はこの新道から秩父大宮に参集した織物問屋の手代や三峰山参詣客を対象としていたのである。この結果、宮側町から大野原を経由し秩父新道につながる道がその後の秩父大宮市街の発展軸の一つとなった。

表通り沿いの宮側町から上町に対して、東横町や今宮横町はどのような変化がみられたであろうか。まず東横町は商家数や業種に大きな変化がなかった。商家数は明治3年が19軒で明治35年が20軒、主な業種は魚商や豆腐商などの食料品販売や飲食店・料理店が中心であった。秩父神社前の妙見横町は小規模であり、商業的な機能が集中していたとはいえない。この時期はまだ現在みられるような番場町の商店街は形成されていなかった。これに対して表通りの市街地より一段下位の段丘面にあたる今宮横町は料理店が多くみられた一方、改伸株式会社大宮工場（製糸工場）や秩父物産織物工場、さらに機屋が2軒記載されている。前者の工場は位置的に市街地のすぐ裏手にあった訳ではなく、やや離れた場所に設立されていたのであるが、下位段丘において秩父銘仙や生糸生産を専門的に行う工場が形成されつつあったことは注目されよう。耕地の限られた秩父盆地において、比較的平坦地を得易く、かつハケからの湧水を利用しやすい下位段丘面に工場が設立されたことは、農業生産以上に織物生産が重要視されていたことを示していると考えられる。その結果、工場を核として段丘の下位方向に市街地が拡大する契機ともなった。

明治後期には秩父大宮の中心市街はそれまでの形態を保ちつつ、おもに宮側町方向と表通りより下位の段丘面に市街の拡大を見せ始めたといえる。

b. 明治後期における転入者

明治後期、秩父大宮が織物取引の中心としての性格を強めていく中で、新たに秩父大宮にはどのような地域から人々が集まり、どのような職種の商品業者が参入したのであろうか。明治42年(1909)から大正4年(1915)までの転入者を記載し

た転籍簿から断片的ではあるが、この時期の転入者の特徴を捉えることにする。

「明治四十二年大宮町転籍簿」には転入者43世帯が記載されている。ここから職業が判明する者を取り上げ、出身地別に示したのが第4表である²⁴⁾。秩父盆地内からの就業者の転入数は31名を数え、そのうち農業が21名であった。これに鍛冶職3名がつづき、小間物商、大工、飲食店といった商工業者が続く、そして通信事務員、会社員、軍人といった給与所得者が転入者の中に含まれていた。多数を占める「農業」が農家経営者であったのか、半農半商といったものであったか、あるいは明治3年の戸籍帳にみられた「農業庸作」といった農業労働者の側面をもっていたのかは不明である。しかし前述したように、明治初期にはすでに農家の生業において非農業的な側面に依存する割合が高かったことを考えれば、農家経営だけではなかったと考えられる。そして事例数が少ないものの、小間物商といった商工業部門に関わる人々が、この時期も秩父盆地から輩出していたことは、商業活動に依存する割合が高かったこの地域の特徴が依然として残っていたことを示唆して

第4表 明治42年から大正4年における転籍者一覧 (人)*1

出身地	業種		
秩父郡内	農業(21) 大工職 会社員	鍛冶職(3) 飲食店 通信事務	小間物商 職工 軍人
埼玉県内	青物商(4) 理髪店(2) 鋳物職	料理店(3) 金物商(2) 入爾職	飲食店(2) 製靴業 官吏
県外	機業(8)*2 料理店(2) 雑貨商 機械製造	農業(6) 牛肉商(2) 酒造業 理髪店	絹織物業(3)*3 旅店経営 靴製造 按摩

(「明治四十二年大宮町転籍簿」より作成)

注)*1()内は人数、ないものは1業種につき1名を表す。

*2群馬県山田郡桐生町出身者4名、栃木県足利郡毛野村出身4名

*3群馬県山田郡桐生町出身1名、栃木県足利郡毛野村、三和村各1名

いるとはいえないであろうか。給与所得者の登場は、農業生産よりも賃金収入を秩父大宮において求める動きが現れていたと考えられる。秩父盆地外からは比較的熟練した技能を必要とする商工業者が参入してきた。代表的な例としては製靴業、鋳物職、粧商などである。また青物商や牛肉商といった食品販売業、料理店、飲食店、理髪業といったサービス業者も多くいた。しかし盆地外からの転入者で注目されるのは、機業者8名と絹織物業者3名である。機業者は群馬県山田郡桐生町、栃木県足利郡毛野村の出身であり、絹織物業者は上記の2町村に加え、栃木県足利郡三和村の出身者であった。3例ではあるものの、桐生、足利といった機業先進地から秩父盆地に絹織物生産に携わる人々が転入してきたことは、秩父盆地における織物生産の成長を示すとともに、織物取引の中心であった秩父大宮が、この時期すでに機業先進地であった両毛地域とかなりのつながりをもっていたことを傍証するものであろう²⁵⁾。これらの転入者の多くは、秩父大宮の市街地よりも、その周辺地区に居住することが多かった。これはすでに中心市街が既存の商工業者で満たされていた一方、織物生産の成長によって都市的な商工業者の需要が市街地周辺部でも高まっていたことが背景にあると考えられ、こうした外来者の存在が市街地拡大を促すもう一つの要因であったといえよう。

2) 昭和初期の商家構成と市街地の変化

大正期から昭和初期にかけて秩父大宮は明治10年代と並んで大きな転機を迎えた。一つは大正5年(1916)の上武鉄道(現秩父鉄道)の開通(熊谷・秩父間)と大正12年(1923)の秩父セメント秩父工場の建設である。また一つは昭和恐慌による織物業の不振とその後の戦時統制による工場転換などである。

昭和初期の市街地や商家構成についての文献資料は乏しく、おもに明治35年の『営業便覧』と戦後の商店配置図などの資料、一部の文献²⁶⁾および、聞き取り調査によって復原を行った。昭和初期の秩父大宮における商家戸数を算定すると、全

体で約280戸²⁷⁾、うち上町から宮側町の範囲で220戸となる。ただしここには東横町、今宮横町などの横町・裏町の商家戸数は含まれていない。各町の内訳は、上町が68戸、中町が46戸、下町が42戸、宮側町が64戸となっている。戸数で見ると、上町は明治35年の『営業便覧』と比較すると4倍以上の増加となっているが、これ以外の町では明治35年と比較して、大きな変化はみられない(第5表)。

各町の業種構成は次の通りである。上町は蚕種業、種苗、養蚕具販売といった農業・養蚕に関わる業種が多い。上町では戦後まで商家の2階で養蚕や蚕種生産を行っていたという。また裁判所がおかれていた関係からか、代書業が少なくとも3軒あった。明治初期と共通する業種としては、桶屋、紺屋、染物商などがみられた。このほかは魚商や八百屋などの食品販売や衣料品販売によって商家が構成されていた。上町の大店であった矢尾商店は大正3年に店舗を木造2階建てからコンクリート建築に立て替え、いまの百貨店に近い形で営業を行うようになった。こうした動きは戦後、中町のいずみや(現在のDマート)や下町の宝田百貨店にもみられたが、戦前においては矢尾商店だけであり、秩父大宮においては先駆的な販売・店舗形態であった。

中町では明治35年とあまり大きな変化は認められない。主な業種は米穀薪炭商や荒物商、呉服商などであり、特に目立った業種はない。この時期になると時計店が中町にも2軒あり、比較的高級買い回り品を扱う店が中町にも登場し始めた。また秩父銀行本店や大日本無尽株式会社秩父支店、東京電力の支店がおかれていた。秩父銀行は地元資本の銀行であるが、大日本無尽は東京に本社をもつ無尽会社であり、同支店は現在のさくら銀行秩父支店の前身にあたる。またこれより時期は遅くなるものの、昭和20年代には足利銀行や日本勧業銀行も支店設置を行っている。現在、中町に都市銀行や地方銀行の支店²⁸⁾が立ち並ぶ市街景観がみられるが、この頃からその基礎が形成され始めていたことを示している。同様のことは東京電

第5表 昭和初期の商家構成

(軒)

業種	上町	中町	下町	宮側町	合計
織物買締商				4	4
糸繭原料商	2			1	3
糸商			2		2
蚕種商	6	1			7
養蠶器具	1				1
養蠶製造			1	1	2
織物商	1				1
繭木商	1				1
肥料商			1		1
書籍			1		1
文具				1	1
時計商		3			3
百貨店	1				1
洋服商		1			1
小間物商		2	1		3
洋物商	1	1	1		3
衣料品店		2			2
靴了商	1				1
反物商				1	1
古物商		1			1
産商	1			1	2
草部商		1			1
土私商	1		1	2	4
靴商	1			1	2
種物商		2		1	3
窯物商				1	1
金物商	1	1			2
陶器商			1		1
桶商	2			1	3
鋸商	3				3
カッス商				1	1
酒造業				1	1
染料商			1		1
業商	3	2	2	1	8
穀物商		3			3
米穀商	1		2	2	5
雑草商	1	1	1	1	4
雑草茶商				1	1
青物・乾物商		5	2	1	8
菓了商	3	3	2	5	13
酒商			2	4	6
豆腐商	1			1	2
肉商	1		3	1	5
魚商	1	1		1	3
八百屋	1			2	3
パン商				1	1
貸屋		1	1		2
玩具商					
釣道具商	1				1
舟具屋	1				1
造花屋		1			1
高申屋	1				1
自転車屋	3	2		1	6
自転車修理業			1	1	2
写真館			1	1	2
旅入宿			1	3	4
旅館	4	1	1	2	8
飲食店	3	1	1	1	6
料理店	1			1	2
寿司		1			1
蕎麦屋			2	1	3
居酒屋	1				1
礼出		1			1
劇場				1	1
理髪店	2	1	2	2	7
医師	1				1
南匠者				1	1
新聞出版				1	1
運輸				2	2
倉庫業			1	1	2
代書業				1	1
洗濯業	3			3	6
織物業				1	1
鉄工				1	1
ブリキ工				1	1
馬具工	1				1
大工	4				4
建具商				2	2
経師屋		1			1
管職	1				1
押印師	1				1
燈籠製造	1	1		1	3
紙箱製造	1				1
染色業	2				2
組屋	1				1
機業				1	1
銀行		2	2		4
電力会社		1			1
郵便局					
織物組合					
合計	68	46	42	64	220

(聞きとりおよび岩田(1987)より作成)
注) 〃は、郵便局、織物組合の所在を示す

力にも当てはまる。こうした外部資本の参入は、昭和恐慌以降、地元資本の銀行や買継商が打撃を受けた後、これらに代わる形で入ってきたと考えられる²⁹⁾。秩父織物の原料はこの時期になると秩父盆地内だけではなく、両毛地域から移入されることが多くなり、この原料供給地側の銀行が秩父大宮に入り、取引決済の便を図ったと考えられる。下町にも戦後になると武蔵野銀行が支店を設けている。

下町では、明治後期にみられた買継商、糸繭原料商が依然としてこの町に集まり、秩父織物業組合の本部もおかれていた。その他の商家にも大きな変化はなかったが、一部に新しい業種、自動車修理業などの登場もあった。自動車の普及は鉄道開通後、秩父大宮を拠点にバス路線が開設されたり、輸送手段としてトラックが導入されるようになったことと関連していた。バスやトラックによる輸送は秩父大宮を盆地内の交通拠点にする働きをもっていた³⁰⁾。都市の発展や変容に鉄道の開通が言及されるが、物資・旅客輸送の直接的な影響はもとより駅を拠点とした地域交通の整備も昭和初期以降は大きな意味を持っていたと考えられる。秩父大宮に関していえば、自動車通行が不能な峠道は交通ルートからはずれやすくなり、この結果、一層秩父大宮に流通や運輸の機能が集中するようになったといえる。また、下町の西側、段丘崖を下りた地区は「シタマチ」と通称され、料亭や芸者置屋が軒を並べていたという。これらの店は主に織物取引の接待に使用され、下町が織物取引の中心として成長するにつれて、歓楽街も成長していったのである。歓楽街の存在は、人口規模や商家戸数には現れない秩父大宮の中心性の高さを示している³¹⁾。

宮側町は商家戸数では上町に次いで多く、中町や下町と同じくらい商家が密集していたといえる。食料品販売や衣料品販売、旅館業のほか洗濯業といったかなり専門的な業種が営業していた。上武鉄道の開通後、宮側町は駅前にあたり、これまで以上に旅館業などはその機能が重要になったといえる。この商家戸数に含まれていない

が、駅と宮側町の表通りを結ぶ道路沿いにも商家が立ち並び、駅前には運輸業者や乗合自動車業者が店を構え、一部の旅館はここに別館を設けたところもあった³²⁾。

東横町は昭和4年(1929)に上武鉄道が延長され、御花畑駅が開業すると、駅前まで商店が並ぶようになった。秩父神社前はこの時期もあまり商家は並ばず、現在のような商店街が形成されたのは戦後のことである。また宮側町から大野原方面への道路沿いには昭和初期頃から次第に商店が並び始め、現在の宮桜商店街地区、相生商店街地区の基礎が形成されていった。

Ⅳ むすびにかえて

秩父大宮が明治期以降、秩父盆地の中で次第にその中心機能を高めていった背景には、一つは秩父大宮とその周辺農村における小商品生産や小規模な商業活動が、江戸時代以来盛んであったことが考えられる。秩父盆地では江戸時代以前より山林資源の利用・商品化や生糸・絹に代表される商品生産が盛んであった。とくに江戸時代後期になると、「青物商」や「土物商」といった零細な商業活動に携わる半農半商の農家が現れるようになった³³⁾。明治初期の商工業者のうち、4割以上が他所出身者によって占められ、さらにその約70%が近在の農村出身者で占められていた事実は、非農業部門に依存する割合が高かったこの地域の経済活動の特色を反映しているといえる。そして交通体系の変化や織物生産の成長により、周辺農村での商業活動から次第に秩父大宮周辺での商業活動に転化し、市街地の拡大を促したのではないであろうか。またこれは直接的ではないにせよ、荒川右岸における明治後期からの織物生産への特化にも、この地域特性は反映されていると考えられる。なかでも明治初年において店借人を多く輩出した横瀬や山田に織物工場が集中したのは、前述の商業活動が盛んであったことと無関係ではないと考えられる。

また、江戸時代に來住した近江商人や越後の酒

造家をはじめ、それぞれの時代において外部資本が参入したことは重要な意味を持っていたといえよう。近い例では昭和初期の恐慌によって秩父大宮の買継商が織物取引の主導力を失うと銀行支店が進出したように、その後は次第に外部資本の参入によって地元資本が担ってきた機能が分担されるようになった。秩父大宮が秩父盆地のその他の市街地と比較して、現在、相対的に大きな規模であるのは、こうした外部資本の参入が一つの大きな要因となっている。外部資本の参入は在来の商家や企業を圧迫する可能性がある一方、当該地域に外部から参入を促すに足る経済的な価値があり、かつ外部から参入しやすい条件がそろっていることを意味している。秩父大宮の場合、江戸時代の絹織物、明治以降の銘仙の取引中心であったということだけではなく、明治期以降、郡役所や裁判所といった行政機能が集中したことや、秩父鉄道の設立に主導的な役割を果たした柿原家のように秩父大宮の有力者が積極的に外部の資本を導入したことも作用しているであろう。

今後の課題としては、同じ秩父盆地のその他の市街地と比較検討が必要である。とくに秩父盆地の地域特性を考える場合、前述した農村部での商業活動のあり方と、明治初年の店借人にみられたような市街地で小規模な商業活動が、他の市街地ではどのような様相をしていたのかが重要になると思われる。

付 記

現地での資料調査においては、秩父市立図書館の千嶋 壽先生にご教示をいただくとともに、同図書館所蔵の資料の閲覧の便宜をはかっていただきました。浦和地方法務局秩父支局には土地台帳と明治期の地籍図の閲覧をさせていただきました。また平成3年以来、忙しい中、秩父市の商店街の皆様には聞き取り調査にご協力いただきました。本稿の作成には、歴史地理学研究室の諸先生方、大学院生の皆さんに貴重な助言と多くの援助を頂きました。ここに記して御礼申し上げます。

注および参考文献

- 1) 内務省総務局(1898)：『市街名邑及町村二百戸以上戸口表』、内務省、14ページ。
- 2) 日下伊兵衛(1937)：『最新調査大日本分県地図併地名総覧』、国際地学協会、13ページ(1989復刻、『地図でみる県の移り変わり(1) 昭和十二年大日本分県地図併地名総覧 附公共機関便覧』、昭和礼文社)。
- 3) 昭和63年(1988)の市町村別小売業年間販売額を比較した場合、秩父市が約601億円で首位であり、次位の皆野町の約129億円の5倍弱に達している。その他の町村は、いずれも売上額が年間100億円に達せず、かつての大宮を中心とした秩父市が商業中心として秩父盆地内で卓越していることがわかる。秩父地域商業近代化委員会(1991)：『秩父地域商業近代化地域計画報告書』、秩父地域商業近代化委員会、60ページ。
- 4) 秩父市立図書館蔵。当時、大宮町戸長役場筆生であった新井市三郎が作成者となっているが、正確な作成年は不明である。
- 5) 株式会社矢尾の酒造部は平成7年(1995)には施設更新のため酒造蔵を移転させ、段丘崖に沿って建てられていた酒造蔵は残っていない。ただし水神の社は残っており、ハケの湧水を利用して酒造業の痕跡は確かめられる。
- 6) 絵図の地筆ごとの地番が、明治9年(1876)の改正名寄帳の地番と一致しないこと、また改正名寄帳の地番は現在の地番と一致することから、この絵図の作成は明治9年より古いと判断した。
- 7) 享保元年(1716)の「松本家御用日記」には、下町、中町、上町、惣円寺横町、今宮横町の5ヶ町に自身番がいたことが記されている。このことから表通りの上中下の3ヶ町と中町の東西両側の横町は既に成立していたことがわかる。
- 8) この地筆は、大宮郷の割役を勤めた松本家の屋敷地であり、明治13年(1880)以降、矢尾家が段階的に松本家より土地を買収し、現在は矢尾百貨店の敷地になっている。
- 9) 秩父大宮の事例ではないが、小鹿野町では街路のうち、西日があたる側は商品の傷みが早いいため、軒を長くとりなど同じ町内でも店の造りが異なっていたという。秩父大宮の場合も表通りをはさんで東側(店舗は西向き)と西側(店舗は東向き)で、江戸時代から類似した状況があり、それが地価に反映されていた可能性もある。
- 10) 秩父市(1967)：『秩父市誌』、秩父市、841～846に記載されている武蔵国秩父郡大宮郷戸籍帳(商工業関係者抜粋)によっている。なお、店借人の出身地については秩父市立図書館蔵の原本にあたり、確認を行った。
- 11) 『秩父市誌』には店借人の戸数を115戸としているが、戸籍原本にあたった結果、「庸作」や「農業庸作」といった業種が10戸ほど計数されていなかったため、これを加えた。また『秩父市誌』には職業無記載の26戸が商工業者数に含まれているが、これは商工業者の人数からは除外した。
- 12) 今宮横町の商工業者数は今宮神社の店借り人のみを数えている。これは字下夕平や字今宮平の店持ちや今宮神社以外の店主をもつ店借り人を特定することが困難であったからである。
- 13) 秩父神社領と今宮神社の店借り人については、それぞれが神社領という性格をもっていたため、単純に表通りと横道の業種分化とはいえない面があるかも知れないが、この時期の商家構成が明治後期以降の商家構成の基礎を形成した点で、通りごとの商業的土地利用の分化がこの時期に始まっていたと考えた。
- 14) 飯塚 好(1989)：秩父の商人・職人覚書、埼玉県立博物館紀要、16、75～92。これには江戸時代、秩父盆地の各地で木炭や絹織物の生産だけではなく、青物商や小商と呼称された農間商人がいたことが指摘されている。
- 15) 酒造に関わった季節労働者については戸籍には記載されていないが、矢尾家の資料によれば明治23年(1890)の時点で、12～13名を数えていた。こうしたことから明治3年の時点でも10名前後の季節労働者がいたと考えられる。
- 16) 中嶋則夫(1994)：定峰における新興地主の成長とその地域的背景、歴史地理学調査報告、6、29～41。
- 17) 明治・大正期の広告や案内書などには、このほかに矢尾利兵衛商店と小鹿野町の村上半四郎商店が買継商として紹介されている場合が多い。
- 18) 同様に、中町の秩父銀行は中町の織物買継商の大森喜右衛門や同町の穀商兼質屋であった新井佐市が主導的地位について設立した銀行であった。また大森喜右衛門は明治10年代、川越第八十五国立銀行の代理店業務を行っていた。
- 19) 宮前藤十郎家は『営業便覧』によれば秩父神社近くの妙見横町で質屋を開業していた。また明治3年の時点では下町にいたことが確認できない。こうしたことから同家は明治初期頃から質屋を中心とした金融業を中心に成長してきた新興商人の代表例と推察される。
- 20) 双六の挿し絵で検討の余地は残るが、岡 孝八商店や根岸乾物店などは8～10間間口はあるように描かれている。これに対して下町(双六では本町となっている)の商家の多くは5～6間間口で描かれ

- ている。
- 21) 『営業便覧』では上町は裁判所の置かれている場所までが記載されており、それより南側の商家の並びは省略されている。この点からも上町の商家・職人の軒数は17軒より多かったと考えてよい。
 - 22) 新聞の発行が行われていただけでは、秩父大宮の中心機能が、小鹿野や皆野などの他の市街地と比較して高次であったと即断は出来ない。しかし、明治・大正期にかけて新聞が地域社会の政治や経済活動に与えた影響力を考えると、秩父大宮が秩父盆地の中で最大の市街地に成長していった要因のひとつとして、地域的な情報・出版業は無視できない機能であったと考えられる。
 - 23) 明治20年(1887)の創業である竹寿館は、柿原萬蔵が自らの店舗に近いところに、東京方面からの取引客を接待できる旅館の建設を望み、土地の提供を行い設立されたという。同館では、昭和恐慌以前までは、買継商や原料商が東京などの取引先や織物業者(生産者)の接待に同館を頻繁に利用していたといい、宿泊だけに使われていた旅人宿とは異なった使われ方をしていた。
 - 24) 転籍簿であるので、戸主の他、配偶者、子供、孫といったすべての転入者が記載されている。このため高齢者や幼児は「無職業」と記載されている。また同じ世帯の中でも複数の人がそれぞれ別の職業に就いている例もあり、世帯ごとの職業分類は困難であった。このため職業別にそれぞれの人数を数え、表にまとめた。
 - 25) 秩父織物の生産の担い手の多くは秩父大宮近在の織物業者であったが、生産の機械化や熟練技術の伝播・普及に関して、両毛をはじめとする他の機業地域からの影響が存在した可能性は指摘しておきたい。とくに両毛地域は銘仙の原料となる玉糸の供給地であり、単に原料給だけではなく、副次的な影響が存在したと考えられる。
 - 26) 岩田泰典(1987)：秩父の商人―屋号にみる町並みの変遷及び近江商人・地元商人の比較考察，埼玉県博物館紀要，14，98～118。
 - 27) 前掲26)では商家数を秩父大宮全体で279戸としている。
 - 28) 現在，秩父市の中心市街には、さくら銀行，東和銀行，埼玉信用組合，足利銀行(以上中町)，あさひ銀行，武蔵野銀行，埼玉県信用金庫(以上本町)の7つの金融機関が支店を設けている。
 - 29) 地元資本の銀行が淘汰されたのは、一つに昭和恐慌期における織物業の不振があったが、これに加えて、銀行の合併政策が進められ、昭和12年(1937)までに、秩父銀行をはじめとする地元系の銀行が、いずれも八十五銀行(現在のあさひ銀行)に統合されたことも影響している。
 - 30) 秩父大宮を中心としたバス路線は、昭和20年(1945)までに小鹿野、皆野、吾野など6路線が設けられた。
 - 31) 小鹿野町でも料理店や芸者をあげる店は存在したが、秩父大宮のように歓楽街を形成するほどではなかった。
 - 32) 現在は廃業しているが、宮側町にあった関根館は駅前には別館を設けていた。
 - 33) 前掲14)。